

第 32 号

編集発行／碧南市

哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町3-100

〒447-0087：TEL. 0566-41-8522

：FAX. 0566-41-7761



悪い風
久野 昭

(国際日本文化研究センター名誉教授、
広島大学名誉教授、哲学たいけん村無我苑顧問)

第二次大戦末期の一九四四年、英米仏連合軍がドイツ軍占領下のノルマンディー海岸への上陸作戦を敢行するにあたり、電波に乗せてフランスの対独抵抗者たちの上陸を予告すべく朗読されたのがヴェルレーヌの詩であったことは、よく知られている。その詩は、上田敏の『海潮音』(二九〇五年刊)では、次のように訳されていた。

「秋の日の ヴイオロンの ためいきの
身にしみて ひたぶるに うら悲し
鐘のおとに 胸ふたぎ 色かへて 涙ぐ
む 過ぎし日の おもひでや
げにわれは うらぶれて こゝかしこ
さだめなく とび散らふ 落葉かな」

この訳詞は、原詩のリズム感をもかなり見事に捉えた優れた詩である。だが、原詩と訳詞とのあいだには、当然のことながら、ずれがある。訳詞は上田敏の作品であつて、ヴェルレーヌの作品ではない。たとえば、「げにわれは」以下の部分を原詩から直訳すれば、「そして私を枯葉さながらにあちこちへ運び去る悪い風を受けて、私は立ち去つてゆく」となり、

「うらぶれて」とはかなり違つてくる。

この「枯葉」も、文字通りに訳せば「死んだ葉」なのだ。つまり、訳詞だけ読んでもそれで原詩がわかつた気になられたのでは、叶わないのである。原典に当たらずに翻訳だけで済ます場合の限界を、読者は充分に心得ておくべきだろう。

さて、右の「悪い風」は、「意地悪い風」「不快な風」「嵐などと訳し換えてよいのだが、いずれにせよ、この詩の原題は『秋の唄』。秋は、とりわけ「悪い風」の吹く季節である。そして秋風を「悪い風」と感じた例は、日本の詩歌にも多い。たとえば、

「この人をまつたぐれの秋風は
いかに吹けばかわびしかるらむ」
(古今和歌集)

「秋風に山のこの葉のうつろへば
人のこゝろもいかゞとぞ思ふ」
(古今和歌集)

「葛の葉のうらみにかへる夢の世を
忘れがたみの野への秋風」
(新古今和歌集)

のたぐい。「秋」が「飽き」や「厭き」に通じれば、秋風は心変わりを誘う隙間風。その風が強く吹いて、人が葛の葉の白けた裏面を見せしめれば、その「裏見」は「恨み」にもなる。そして、人の一生を四季にたとえるなら、秋はそろそろ老境に入る季節。冷たくなつてきた風が身にしみる。

「秋風や仏に近き年の程」とは、小林一茶四十六歳の句。もつとも、待ち望んだ「神風」も吹かぬまま日本が敗れた一九四五年に十五歳であつた私の年齢は、いまずでに秋を通り越して冬に入つていなるほど個人的には、必ずしも悪い風ばかりではなかつた。しかし、依然として日本はかなり悪い風に曝されているのではない。しかも多くの人が、悪い風に吹かれて裏返つた葉の白さを見つめもしないまま、「うらぶれて、こゝかしこ、さだめなく、とび散らふ」実感すら持てなくなつていのではないか。

ついでだが、「うらぶれて」の「うら」とは、「うら悲し」「うら寂し」などの「うら」と同じく、表には出ないものとしての思いである。その思いが心のなかで揺れ動いて、が「うらぶれて」である。敢えて言えば、この国の人があまりうらぶれもせず、「こゝかしこ、さだめなく、とび散らふ」風情が、近頃、私は気になつてしかたがない。



梅原猛名誉村長特別講演会

演題「人類の哲学」の構想

平成二十二年十二月五日に碧南市芸術文化ホールにおいて、哲学者で、哲学たいけん村無我苑名誉村長の梅原猛先生による特別講演会を開催しました。特別講演会の詳細については、以下の要約をご覧ください。

私の哲学遍歴

私は哲学を一生の仕事として選び、西田幾多郎、田辺元というすぐれた哲学者の学風が残る京都大学文学部哲学科に学んだ。そして大学時代、ニーチェやハイデッガーの実存主義哲学を勉強するとともに、ソクラテスやデカルトから学問の方法論を学んだ。

三十代の末に研究の対象を西洋哲学から日本の思想に移したが、それは西洋哲学の限界を感じ、新しい人類哲学の原理が日本の思想伝統の中に見つけられると思っただけである。

そして五十年を超える日本思想研究の結果、五年ほど前、日本文化を形成する中心思想というべきものを発見した。それは「草木国土悉皆成仏」（そうもくこくどしつかいじょうぶつ）という思想である。

「草木国土悉皆成仏」の思想

平安仏教は、最澄の始めた天台宗と空海の始めた真言宗の二つの宗教によつて代表される。ところが天台宗の中に天台密教すなわち台密が生まれ、台密は天台宗と真言宗が合体したものであるといえる。その台密の結論が天台本覚思想となり、「草木国土悉皆成仏」という言葉で端的に表現される。この思想が浄土、禅、法華の鎌倉仏教の共通の前提となる。

このような天台本覚思想にもとづく芸能が能であるといえる。特に世阿弥及び禅竹の能においてこの思想がはつきり語られる。「鶴」「西行桜」「殺生石」など。またこのような思想は日本の絵画や俳諧においてははつきり示され、日本の芸術の精髓となる。

縄文文化は日本の基層文化

縄文文化は狩猟採集生活の上に立てられた、土器を伴う文化である。縄文土器は約一万四千年前に始まるが、五千年前ごろの中期縄文土器はすばらしい。この縄文土器のすばらしさを発見したのは岡本太郎である。



縄文土器（火焰式土器）

日本は周囲を海に囲まれ、特に東日本ではサケ・マスの遡上があり、大変豊かな狩猟採集というより漁労採集の文化が栄えた。

そして農業の移入が遅れる。稲作農業が日本に移入されたのは約二千三百年前といわれていたが、最近の説では五百年ほど繰り上がる。しかし約一万五千年前に中国で稲作農業が開始されたことを思えば遅い。稲作農業を基盤にして日本で最初の王朝をつくったのはスサノオ、オオクニヌシの出雲王朝であるが、オオクニヌシは後に大黒様という神と合体し、漁労採集生活の神である恵比寿様とともに福の神として崇拝される。

貝塚の思想

縄文文化の遺産として貝塚が日本各地に残る。貝塚は、戦後の唯物論的な考古学ではゴミ捨て場と考えられたが、それは違う。それはいわば貝の墓場である。それは縄文人が食べた貝ばかりか獣や魚などの再生を願って、その骨などを葬る墓であり、そこにはまた人間の骨や壊れた土器も葬られている。土器もまた生き物であり、それは手厚く葬られることによつてまた新しい土器となつて甦つてくるといふ信仰による。このような風習は、現在においてもうなぎ供養とか針供養などに残っている。



貝塚の貝層（福井県若狭町鳥浜貝塚）

ヒスイの勾玉

縄文時代及び弥生時代においてもとても大切にされたものはヒスイの勾玉である。ヒスイの緑色は雪の中からちらりと現れる植物の緑を意味し、植物の霊といつてよい。そして初期の勾玉は動物の形をしている。つまりヒスイの勾玉は植物及び動物の霊を表すものであり、それはもっとも呪力あるものとして大切にされる。



ヒスイ製の勾玉

西洋文明の限界

ところがこのような日本の思想と違って、西洋文明は人間中心の文明である。プラトンは、人間は理性をもつゆえに他の動物よりすぐれていると考える。この考え方はキリスト教に受け継がれ、聖書には、人間は神の似姿である理性をもち、それゆえに他の被造物を支配することができるという考えがある。

こういう思想がデカルトに受け継がれ、「デカルトは「われ思う、ゆえにわれあり」という命題によって、理性をもつ自我を世界の中心におく。その自我は肉体をもたず、自然科学的な法則によって支配される自然を認識し、自然を奴隷の如く支配することができるという。

近代文明はこのようなデカルト哲学に裏付けられているが、そこにはまったく生命の影がない。それは人間中心主義が極限化された思想で、このような思想によって導かれる人間はひととき豊かで便利な生活を享受するかもしれないが、それは破滅に通じる。

今、しきりに地球環境破壊の問題が取り沙汰されているが、その解決のためには近代西洋哲学の矛盾が厳しく批判されねばならない。人間中心主義の哲学から人類の原初的思想である、あらゆるものには命があると考える哲学に帰らねばならない。

【写真提供】

若狭三方縄文博物館

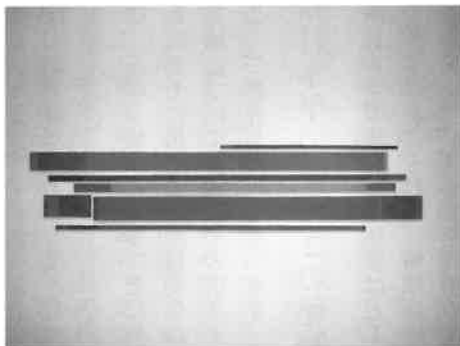
福井県若狭町立の博物館です。縄文時代をいろいろな方向からとらえた展示をしています。縄文文化を後世に伝え、また、それを通して現代を見つめなおすきっかけを提供することをコンセプトとしています。初代館長に梅原猛先生が就任しています。

瞑想回廊企画展示

平成二十二年度に開催された瞑想回廊企画展示をご紹介します。瞑想回廊企画展示は、哲学たいけん村のコンセプトに則り、訪れた人の「視覚」と「感性」に訴えかける美術展として、開村以来毎年開催しています。二十二年度は、三十四回目の企画展示として豊田市在住の画家富田廣氏の作品を展示しました。

「色の眺め」

富田廣 油彩展



七月二十七日から九月二十六日にかけて「色の眺め」富田廣油彩展を開催しました。文字通り「色々」に塗り分けられた自作のキャンバスを自由に組み合わせ、キャンバスとその周囲によって作られる空間そのものを絵画とする作品が展示さ

れました。色と色との関係性、キャンバスとその周囲との関係性。それぞれの関係性について考えさせられる作品三十点が瞑想回廊を彩りました。

梅原猛名誉村長特別展

平成二十三年一月八日から三月十三日にかけて「梅原猛名誉村長特別展」を開催しました。梅原猛先生が平成三年一月に名誉村長に就任してから二十年が経ちました。ここで改めて、皆さんに梅原猛先生を知っていただくとう企画した特別展示です。今回の展示にあたり、梅原先生から来苑者に宛てて特別にメッセージをいただきました。また、梅原先生ご本人から、学生時代に読んでいた書籍や、執筆した原稿などをお借りすることができました。期間中多くの方に訪れていただき、皆さんと梅原先生とを結ぶ役割を果たすことができました。



名誉村長特別展記念講演会

平成二十三年二月十二日（土）、哲学たいけん村無我苑研修道場において、梅原猛名誉村長特別展の開催を記念して講演会を開催しました。講師に小川侃先生をお招きし、梅原猛先生の業績やその意義等についてお話ししていただきました。当日は多くの方に聴講いただきました。ここにその要旨を掲載します。

「梅原日本学の世界史的意義」

小川 侃

（京都大学名誉教授、人間環境大学特任教授）

梅原猛先生と私は二十歳の年齢の差がありまして、京都大学の哲学の私の先輩であります。梅原先生のあり方の意味の確定については、いまや歴史的な意義付けの段階に入りつつあります。梅原先生について私がまとまった研究をしたのは、一九八〇年にドイツ現象学会のドイツ、トリアーでの国際会議の講演に招待されたときのことです。私は講演の中で当然ながら西田幾多郎や田辺、九鬼、三宅などの京都の哲学の伝統について話しました。そのなかでとくに日本の文化と歴史、日本の仏教を深く理解しながら哲学する最も重要な代表として梅原猛先生を指摘し、高く評価したのです。私の論

は、基本的に方法の上からは、梅原先生の哲学を現象学・解釈学の伝統に位置づけるものでした。私は基本的に和辻哲郎の衣鉢を継ぐ梅原猛という風に定式化しました。こんにちでも私のこの考えには変わりはありませんが、そのうち、梅原日本学は、ますます進展と深化を発揮して範囲の広がりは、和辻哲郎のレベルを追い越しておりますし、また、深さにおいても和辻哲郎をはるかに凌駕しているように思われます。梅原先生の関心はなによりも宗教と人間の生き方、魂の在り方と生き方にあるのです。



講演の様子

また、梅原猛先生が、京都の地に国際日本文化研究センターを設立したということに私は大きな意味を見出します。昭和の終わり、日本は、日本文化の重要性を全世界に示すべきセンターを必要とし

ていました。センターの設立は、梅原日本学の一つの具体的で且つ政治的な成果であると評価してよいと思います。もともと梅原先生の日本学と日本研究があつたからこそ、そして、それを当時の中曽根首相が高く評価したからこそ、国際日本文化研究センターの創設（昭和六十二年）は可能であつたといつてさしつかえありません。

梅原日本学の強力さの秘密

梅原日本学の爆発力の秘密はどこにあるのでしょうか。それは、梅原猛先生は哲学を研究し、哲学思想を研究したという経緯をもつことに由来します。哲学というのはあらゆる思考の訓練のもとです。哲学は高度に理論的で且つ統制の取れた思考を可能にするので本当によい思考の訓練になるのです。名誉村長特別展をご覧になった方は見られたと思いますが、梅原先生は、ハイデッガーのきわめて難解な『存在と時間』を原書で本がぼろぼろになるまで読んでおられます。このような原書との格闘という仕事が思考を鋭利にし且つ深めるのです。それだけではありません。文献を読み解く力、文献を解釈してそれを平易に捉えなおす力、それらはすべて哲学研究を行うことで可能になるのです。



『存在と時間』（名誉村長特別展展示会）

方法論としては、デカルトから多くを学んだと思います。それは疑うことです。梅原猛先生は、学者や世間が当たり前のこととみなしている学説を疑うのです。このことは次のように総括されています。「一つの仮説が創造されるのには三段階の過程が必要である。一は懐疑、二は直感、三は、実証である。学問においてはその問題についての長い懐疑の時間があり、その懐疑の結果突然に直感がひらめき、仮説が生まれる。しかしその仮説の徹底的な実証が必要である。自然科学者の場合は実験であろうが、人文科学者（ママ）の場合は、文献調査とフィールド調査である。」（『親鸞と世阿弥』、文藝春秋、九十六頁）。このような方法は、じつは現今の哲学の中では、現象学や解釈学に近いものです。

梅原猛先生は、文献を読んで調査して

いるうちに学界の定説や学界の有力者によって常識とされていることが「おかしい」と思うようになります。「こんなことは不可能だ、ありえない」という感じが生まれるのです。この「不可能だ」「ありえない」という感じ、直観あるいは一種の思い込みが重要なのです。これは一種の洞察です。この洞察をさらに検証するうちに、あるいは、この洞察を掘り下げ、深く熟考するうちに一定の己の思想ができてきます。その結果、このように学界の常識や定説を疑うようになります。もともと正確に言うと、ひよっとすると正しいかもしれないけれどもまずこは「妥当ではない」と判断を停止するわけです。このように判断を中止してさらに文献を研究し考察を進めます。このあたりのことを、梅原先生は次のように表現しています。「しかし学者としてもっとも楽しいのは直感がひらめいたときである。(…)

このような直感のひらめきの前に長い懐疑の時間が必要なのである。」(『親鸞と世阿弥』、文藝春秋、九十六頁) この懐疑の時間というのは、じつは、よく考え、よく文献にあたり、呻吟している時間なのです。それは研究者にとってもっとも楽しい時間でもあります。逆説的に響きますが「苦しいけれども楽しい時間」なのです。この直感(＝直観)がひらめいて、「真実はこうだったのだ」と光が現れてくる瞬間こそは、現象学という「現象」が開かれ現れるときです。真理が真理自身のほうから己を顕わにし、己を示して

くるのです。

文献調査と並んで梅原猛先生が重要視している研究方法にフィールドワークがあります。梅原先生のように哲学者でフィールドワークの必要性を高く評価している人は非常に少ないのです。哲学者もフィールドワークをする必要があります。それは、現れに直接に接することが必要だからです。現れに接すること、現象への関与は哲学者にとっていつも新しい真理の可能性を開くものだからです。事象との直接の接触こそが常に真理の源泉だからです。なによりもまず、事柄に帰り、事柄に直接触れることが大切なのです。決して文献との接触ではありません。

思想もしくはアイデアと文献との関係

ここで文献研究の際に一般に見過されがちな思想もしくはアイデアと文献との関係がどのようなになっているのかを考えてみましょう。もし皆さんが文献を研究すると文献の中にすべてのことがあらかじめ書かれており、文献のなかの書かれてある意味を学者は取り出して見せるとんでもない誤りです。文献というのは、思想もしくはアイデアにとっては一種の拘束着のようなものです。文献は思想の世界に飛翔しようとする哲学者のアイデアをいわば大地のほうにひきず

り降ろそうとする物質性を持つているのです。哲学というのは最終的には「アイデアの冒険」です。哲学者は、文献と言わば「つかずはなれず」の関係にあるのです。「文献にこだわりつつ、それに拘束されない」というのがあるべき哲学者の態度です。このような態度は、梅原猛先生の文献に対する基本的な態度であると思われまふ。もし哲学者が文献にこだわり、文献に拘束されてしましますと彼は単なる文献学者にすぎません。

この点で梅原猛先生の津田左右吉の日本史学への批判は大いに耳を傾けるべきことです。津田左右吉は、一部の文献研究だけで己の意見を決めて、まったくフィールドワークをしなかつたということ。彼はまったくフィールドワークをしなかつたので過ちばかり犯しているといふのです。歴史学を研究する人によく忠告されることは、歴史書や歴史の文献を読むのに必ず地図を参照しながら読みなさいということ。ある歴史的出来事がいつたいたいどのような地形で、どのような周りの環境のなかで起こったかをみる必要があります。天下分け目の戦いと言われた徳川家康と石田三成の戦いを研究している人が一度も関ヶ原を見ていないという場合には私はその人の学問を信用することはできません。この意味では、フィールドワークは人文系の学問全般においても重要なことです。哲学においてもこのことは言えます。

梅原先生は、文献研究とフィールド研

究の両方を生かしながらともに照らし合わせるということを経験的に目指していると思われまふ。「哲学は思想の深さと現実を把握する正確さの両面を兼ね備えねばならぬ。」(『翁と河勝』、角川学芸出版、一二二頁) という考えに、私はまったく同感です。ここには、これからの哲学、将来の哲学の思索は常にフィールド研究による明示をめざさなければならぬという方向が示されています。文献研究とフィールド研究の両方をいわば束ねて生かし救い上げようとする梅原哲学のこれまでの研究と将来の研究のあり方が貴重であると思われまふ。「私はもっとも哲学者であるが、部屋の中でただ思弁していることが哲学であるとはおもわない。実際の世界を見てそこからヒントを得て思弁をするというのが私の学問の態度である。」(『日本の霊性』、佼成出版社、二十七頁) この言葉は哲学の方法と態度に関して最も重要な点であり、梅原日本学を貫く一本の赤い糸です。



考古学(フィールドワーク)の成果を盛り込んだ近著『葬られた王朝』(新潮社)

環境問題へのアプローチ

次に梅原猛先生の「学問の広さ」についてお話しします。この広さというのは、まずもって環境問題へのアプローチが挙げられます。地球温暖化にとつての炭酸ガスの問題は地球環境問題の最たるものです。梅原先生の最近の議論は、太陽の哲学、太陽の神への畏敬というべきものです。近著『「太陽の哲学」を求めて』

(PHP出版、二〇〇八)というエジプト

考古学者吉村作治氏との共著を読むと、太陽に対する讃歌が語られています。太陽は日本ではアマテラスとして現れています。エジプトではラーと呼ばれる神です。日本で最も大きい力をもった仏教は、真言密教です。この真言密教の中心は、大日如来つまり太陽であります。古代ギリシャの最も重要な神も、やはり太陽です。それは、アポロンと呼ばれます。太陽光発電、風力発電など、太陽光や自然の現象からエネルギーを取り出せば石油や石炭という化石燃料に頼る現在の火力発電などと違って炭酸ガスの発生はほとんどないのです。その意味で、地球温暖化を救うのは、太陽なのです。そこから新しい意味での太陽の神への信仰が生まれます。この太陽神を世界の宗教のなかで位置づけるために様々な文化を統合する太陽神を見出す必要があります。それゆえ、世界文化のなかで太陽神の位置を確認し、また、太陽神をいわば「同じもの(太陽)の異なった現われ」として見

出さねばならないし、その見出しのための論理が必要となります。梅原先生と吉村氏はともに日本の知見をもとにして、そこから現象学という連合・連想の方法によってエジプトの神の信仰の構造を析出するというきわめて正統的な方法を駆使しています。これは異なったものの連関を通じて同じ一つのものの現われに出会うということです。



梅原猛先生は、真言密教を長いあいだ研究していました。そしてこの真言密教という思想は、草木国土悉皆成仏という日本仏教の教えと深く結び付きます。つまり、太陽を中心とする環境思想と、真言密教の思想をどのように総合するのかという点です。環境の思想は、今度は、仏教の思想と根本のところまで底が通じているのです。つまり自然の世界の全体が救われなければならないということです。

自己の救済は世界の救済と一つにならないといけないわけです。己を救済することが根本のところでは世界の救済になることというのは、まさしく己の利益になることが他者の利益につながるという仏教の根本の教えにつながります。これをつなぐのは、太陽の哲学です。このような思想は、大乘仏教の菩薩道の教え、菩薩行の教えと結びつきます。己に利益となることが同時に他者たちの益につながるという考えです。これを梅原猛先生は、「自利利他の教え」と要約しています。これは普遍倫理学でいうところの黄金律なのです。イエス・キリストや孔子がいうところの「己がしてほしいことをひとにしてあげなさい」という倫理の原則です。要するに、人間が己にとつて利益となることは同時に人間にとつての他者たち、自然と世界の全体、つまり草木国土悉皆成仏につながるという思想です。

草木国土悉皆成仏の説

梅原猛先生によると、草や木も、また国土つまり大地や鉱物もすべて仏の本質を持ちかならず成仏できるという説は、日本の仏教の特色であるといわれます。この草木国土悉皆成仏(そうもくこくどしつかいじょうぶつ)という思想は、草木国土という言葉のなかに自然の全体、国土の全体が含まれていますからまさに環境保全、環境を守るという思想につながるのです。したがってこの思想は、デカルトのような人間中心主義の世界観か

ら日本の大乘仏教のように世界が草木つまり植物を中心として太陽の恵みを受けながらいわばリサイクルする世界の見方への転回、転換を意味するのです。太陽は毎日生まれ且つ没するのですが、それと同じように、草木は一年を通じて生まれ且つ没するということを繰り返しているのです。それゆえに死と再生の世界観、リサイクルの世界観といわれます。この死と再生を繰り返すリサイクルの思想が現代において新しく光を放ちます。そこに、梅原先生は、太陽の哲学もしくは草木国土悉皆成仏の理論の実現を見ておられます。



草木国土悉皆成仏という言葉は、たとえば、能楽のなかで多様に使用されています。たとえば源頼政が天皇を夜な夜な苦しめた鶴を弓で射殺した事件を扱う「鶴」という能では、幻想のなかで、鶴が射殺される直後に「草木国土悉皆成仏」と唱えられる。ところがこの直前に「一佛成道観見法界」という句があるのを見逃してはなりません。一人の仏が悟りを開き、成仏するときに、草木も木も国土の全体がすべて仏となるのです。ここには、真言宗と天台宗の日本の二つの密教が総合されているという風に解釈されています。私は、一人の仏が仏道を完成するときに草木も木も国土の全体がすべて仏となると解釈しています。ここには大乘仏教の自利利他の教えが凝縮しているのです。こんにちの状況の中でいえば私たちの一人ひとりが炭酸ガスを中心とする温室効果ガスの排出削減のために努力することは、世界全体を救うことになることと解されます。それは各人が菩薩になることでもあります。

浄土教の二種回向説の新解釈

梅原猛先生の学問の深さというのは、法然の心に深く迫って「二種回向の説」をとりだしているということに示されます。二種回向というのは、普通の、親鸞の浄土信仰の中にある思想であり、往相と還相のことをいいます。往相とは、私たちの生きているこの世界つまり娑婆の世界からあの世つまり極楽浄土の世界に

行くことです。ところが往相で満足してはいけません。仏教は基本的に自利利他の教えです。死んで往相していきくらあゝの世が、つまり極楽浄土が居心地良くとも、この世に再び人々を救う菩薩として戻ってこいというのです。私にもう悟ったからよいのだというのは、本当の意味での仏教徒ではないのです。そうではなく、徹底して自利利他のために再度この輪廻転生の世界に戻ってきて人々のために菩薩の行を行わなければならないのです。法然は三度この輪廻転生の世界に立ち戻ってきて利他のために働いたといわれます。これが徹底した仏教の悟りの道なのです。

この二種回向の説を梅原猛先生は、最も美しく且つ説得力をもって『親鸞のころ』(小学館、二〇〇八)のなかで語っています。この書物が、「永遠の命を生きる」という副題を持っているのは意味深いのです。つまり私たちの魂は、何度この娑婆の世界と極楽浄土の世界を行ったり来たりすることができるということです。今までに述べた、これら地球環境問題と大乘仏教という両者の総合を考えてみるとよいでしょう。おそらく梅原猛先生はこう言っているのです。「おまえはこの星のために、この地球という星のために何ができるのか、おまえは利他の精神を発揮してこの星のために一体何ができるのかを考え、且つ実践するべきである」と。

最後に

キルケゴールという実存主義の根本となる思想家がいました。彼は、梅原猛先生が若いときに多くを学んだハイデッガーに決定的な影響を与えており、ハイデッガーの多くの術語は、たとえば「反復」という概念の場合のようにキルケゴールが作ったのです。「私の独自のあり方」を実存といいます。この実存という概念自身が彼のものです。彼は、人間の生き方を、つまりそれが実存という言葉で呼ばれるものですが、三段階に分けておられます。第一段階は、美的実存です。第二段階は倫理的実存です。第三段階の最上階は、宗教的実存です。キルケゴールは、この宗教的実存を最高のものとしていました。

日本の哲学者で美的実存の典型は九鬼周造でしょう。その上にある段階は、倫理的実存です。この典型は、和辻哲郎でしょうが、実は、彼は方法の上ではかなり美的実存に近いのです。日本の美意識を探求したともいえるからです。これに対して人間を越えた絶対的なものを求めるという気迫に満ちていたのは西田幾多郎でしょう。ところが、西田は哲学者としてはもっぱら己の意識、己の机の上での思索によって世界と自己をつなぐ論理を紡ぎだしたのです。これとは反対にフィールドワークを重んじる梅原猛先生は、思うに、この宗教的な実存に最も近いと思います。宗教的な実存の最高峰は、

二種回向の説です。なんどもこの娑婆の世界に立ち返ってきて人々のために菩薩の行を行うというものです。明治維新以前の神仏習合がじつは日本の宗教の在り方であるという卓見も日本では神と仏は合一してよいのだというきわめて日本的な考えを示します。その意味で梅原猛先生は首尾一貫した日本の哲学者です。日本の霊性の哲学者です。霊性とはほかならぬ精神です。私の考えでは、霊性、精神とは究極的にはブネウマつまり風になるのです。梅原猛先生は、日本の風の伝統の哲学者です。



「にしばた哲学の小径俳句 i n g」

平成二十二年度「にしばた哲学の小径俳句 i n g」を六月六日に開催しました。今回は、一般の部では八十五名、小中学生の部では三六〇一名の方にご参加いただきました。この「にしばた哲学の小径俳句 i n g」は、哲学たいけん村無我苑から愛知県唯一の自然湖沼「油ヶ淵」の湖畔にある「花しようぶ園」や、蓮如上人ゆかりの「応仁寺」を巡る「哲学の小径」を散策していただき、自由に五七五を詠んでいただくイベントです。投句いただいた作品の中から審査員の先生方の選考により選ばれました句を掲載します。



● 一般の部

大賞

雨蛙田の神連れて来たりけり

碧南市 神谷明子

特別賞

哲学は苦手苦菜を見に行かな

碧南市 小鍛冶千枝子

蟻地獄いま哲学を学ばねば

安城市 山本英子

炎天を来て瞑想の椅子に掛く

安城市 金田義子

吹く風に遅れて落ちし竹の皮

高浜市 新実あさこ

花菖蒲蓮如鼻痕を通しけり

岡崎市 中根恵子

笑はせてみたま閻魔や花菖蒲

安城市 横山鈴春

五分ほどの瞑想体験椅子涼し

東海市 斉藤浩美

花菖蒲民話ひとつが残る里

碧南市 高橋文男

● 小中学生の部

大賞

はなしようぶおなじせいふくきてならば

鷲塚小学校一年 高橋にいな

特別賞

昼と夜ちがった顔の花しようぶ

大浜小学校三年 神谷 彩

新緑の小径で気分はソクラテス

大浜小学校六年 磯貝詩子

花しようぶあぶらがふちがにじの色

鷲塚小学校五年 西中 彩

てんとう虫ぼくのおなかで休けいかい

西尾市米津小学校四年 吉村太一

花しようぶ写生のときはモデルさん

柵尾小学校三年 杉浦仁香

花しようぶむらさき色の太陽だ

中央小学校五年 樺山晴香

へびイチゴへびにおしえてあげなくちゃ

西尾市三和小学校二年 稲吉 舞

ありんこさんわたしのゆびさきお気に入り

西尾市鶴城小学校二年 神尾奈菜

にしばた哲学の小径俳句 i n g
平成二十二年六月六日(日)
午前九時〜午後四時

主催 碧南市教育委員会

後援 碧南市、碧南市議会、碧南市観光協会、碧南商工会議所、碧南市商店街連盟、碧南文化協会、西端区

選者 小笠原和男(俳人、「初蝶」主宰、碧南市在住)

岡島礁雨 (俳人、碧南文化協会俳句部、碧南市在住)

服部くらら(俳人、「若竹」編集同人)

主催 碧南市教育委員会

後援 碧南市、碧南市議会、碧南市観光協会、碧南商工会議所、碧南市商店街連盟、碧南文化協会、西端区



「長月の会」 中国琵琶のひびき」 ティンティン

平成二十二年九月十一日、無我苑瞑想回廊前中庭において、「長月の会」中国琵琶のひびき」を開催しました。今年度は、中国西安出身の中国琵琶奏者ティンティン氏に出演していただきました。ティンティン氏は、音楽活動の他に、中部大学で講師として活躍されています。この地域に縁のある方です。コンサートでは、中国琵琶の演奏に加えて、美しい歌声も披露していただきました。また、正倉院の宝物螺鈿紫檀五弦琵琶（らでんしだんごげんびわ）のお話を交えながら、中国琵琶の特徴やその歴史的な背景等についても説明していただきました。



ティンティン氏の「今は、中国と日本は仲が悪いと言われるけれど、兄弟のような国だからきつと仲良くなれると思っています。」という言葉が印象に残っています。

います。一面の琵琶を通じて、古から現代へと連綿と続いてきた日中の文化交流について想いを馳せる機会となりました。ティンティン

(中国琵琶奏者・ボーカリスト)

西安出身、両親共に音楽家であり、三人姉妹の末娘として音楽の英才教育を受ける。六歳から琵琶を始める。国立西安芸術学校中国琵琶専攻を首席で卒業。一九九七年留学生として来日。二〇〇一年第十回在日留学生音楽コンクールでの優勝をきっかけに全国デビュー。二〇〇二年アメリカのシアトルで行われた「国際児童祭」や日中国交正常化三十周年記念「デイナーショー」(共演：アグネス・チャン)に出演したほか、「東大寺大仏開眼二五〇年慶讃コンサート」(東儀秀樹・大伽藍コンサート)にゲスト出演。二〇〇四年韓国Soul Performing Arts Festivalにて二日間コンサートを行い、翌年二〇〇五年に加藤登紀子さんと日本縦断の旅に出掛け、新曲「この星を庭として」を愛・地球博会場で発表(テレビ朝日系番組「森と水の旅」で全国放送)。同年五月ジュディ・オングさんのコンサート(東京・名古屋)にゲスト出演。二〇〇七年三月、中部大学大学院にて「言語文化」博士号取得、その後中部大学国際関係学部・中国語中国関係学科講師に就任。教鞭を執りながらブルーノートでライブの開催や「BS『世界ウルルン滞在記』BS朝日『中国神秘紀行』にてテーマソングを演奏していた。

●お知らせ●

涛々庵茶会・三曲定期演奏

涛々庵茶会は無我苑の市民茶室涛々庵(とうとうあん)を使用した市民茶会です。毎月席主によるそれぞれの創意工夫がなされ、華やかな茶会となっております。また、茶会に華を添える箏、三弦、尺八による三曲の定期演奏も研修道場安

吾館にて行っています。

涛々庵茶会は、毎月第四日曜日(十二月のみ第三日曜日)に開催します。料金は一服四百円、時間は各日とも十時から十五時まで(立礼茶席は十六時まで)です。また、三曲の演奏はお茶会にあわせ随時観覧無料で行っています。どなた様でもお楽しみいただける内容となっておりますのでぜひお越しください。

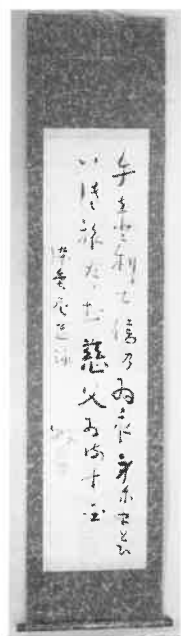
平成23年度涛々庵茶会・三曲演奏予定表

月 日	涛々庵茶会		三曲演奏
	席 手	流 派	出演団体
4月24日	小沢わさ子 (宗和)	松尾流	山本加代子社中・竹秀会
5月22日	磯貝 勝代 (宗代)	裏千家	祥友会・竹秀会
6月26日	小笠原美美 (宗文)	久田流	若草会・竹秀会
7月24日	山田 昇 (宗昇)	裏千家	祥友会・竹秀会
8月28日	小林ミサ子 (宗実)	裏千家	絲音の会・竹秀会
9月25日	杉浦紀代子 (紀翠)	煎茶道松月流	菊香次社中・竹秀会
10月23日	杉浦 伸子 (宗伸)	裏千家	若草会・竹秀会
11月27日	藤原知香子 (宗知)	裏千家	絲音の会・竹秀会
12月18日	高山 恵子 (宗恵)	表千家	祥友会・竹秀会
平成24年 1月22日	杉浦みどり (宗翠)	裏千家	祥友会・竹秀会
2月26日	杉浦 時子 (宗時)	宗偏流	絲音の会・竹秀会
3月25日	小島 和美 (宗美)	裏千家	若草会・竹秀会

伊藤証信の遺品

暁鳥敏 掛け軸

「手をとりて信の衣身にまとい
いつ旅たむ慈父あます国」



暁鳥 敏について

「善人なをもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」。これは、浄土真宗の宗祖親鸞の言行録『歎異抄』の一文です。この一文について、浄土真宗の門徒でなくても、現在多くの日本人が知っています。しかし、この『歎異抄』の存在を明治時代まで多くの日本人は知りませんでした。蓮如によって誤解を招きやすい危険な書であった『歎異抄』。これを近代になって再発見したのが清沢満之です。清沢は、生涯『歎異抄』を『エピクテトス語録』とともに身から離しませんでした。暁鳥敏は、その師清沢満之と師が見出した『歎異抄』の存在を世に紹介した人物です。暁鳥敏は、伊藤証信と同時代を生きた仏教思想家、伝導者です。ほぼ同時期に京都の大谷尋常中学、東京の大谷大学に入学しています。大学を卒業後、彼は一時外交官を志しますが、清沢満之の私塾浩々洞(こうこうどう)に身を寄せます。そして、専門用語を使わないで仏教の真意を一般の人に伝えるような雑誌を作りたいと、明治三十四年(一九〇二)一月、雑誌『精神界』を刊行します。暁鳥は、

編集主任として活躍します。この『精神界』には、「精神主義」をはじめ清沢満之の多くの論稿が掲載されました。死の前までのおよそ二年半の間に寄せられた清沢の論稿は、約五十篇に及びます。これらは精神主義運動と呼ばれ、近代日本の思想界、宗教界に大きな影響を与えました。

明治三十六年(一九〇三)一月、暁鳥は『精神界』に「歎異抄を読む」の連載を始めます。連載は八年間五十五回続きました。その内容は、解説書というよりも暁鳥自身の「感銘記」といってよいものでした。暁鳥は、『歎異抄』に記された親鸞の言葉を自分の問題としてどう受け止めたかを表白しています。この「歎異抄を読む」の連載以降、それまで一部の僧侶しか読むことのできなかった『歎異抄』は一般の人の知るところとなっていくのです。「歎異抄を読む」は、後に『歎異抄講話』と表題を改められ、現在でも講談社学術文庫で読むことができます。

伊藤証信と暁鳥敏

伊藤証信と暁鳥敏との間には長く交流があったようです。大正六年(一九一七)、伊藤が京都で宗教新聞『中外日報』の記者をしている際、暁鳥は、記者の補充の

ため金沢在住の一青年を紹介しています。また、暁鳥は、伊藤の雑誌『愛聖』や『無我愛』に寄稿している他、西端の無我苑建設にあたっては寄付をしています。

〈参考文献〉

『暁鳥敏の挑戦』、松田章一、北國新聞社出版局、二〇〇五
『伊藤証信とその周辺』、柏木隆法、不二出版、一九八六
『歎異抄講話』、暁鳥敏、講談社、一九八一

●暁鳥 敏(あけがらすはや)

一八七七～一九五四

明治から昭和にかけての仏教思想家、仏教伝導者。明治一〇年(一八七七)、石川県石川郡出城村北安田真宗大谷派明達寺で誕生。明治二十四年(一八九一)得度。金沢共立尋常中学、京都大谷尋常中学を経て明治二十九年九月真宗大学本科に入学。この年、清沢満之を中心に東本願寺の宗門改革運動が起こる。暁鳥は、大学生改革委員となり、百余名とともに退学処分となる。翌年復学、同三十二年卒業。住職となり、東京に出て清沢の浩々洞に入り、以後、生涯を精神主義に基づく仏教伝導に捧げ、足跡は日本全国をはじめ欧米、中国、朝鮮に及んだ。寺内に香草社を営み伝導書の著述と出版を続けた。現在の無我苑にもこの香草社から出た暁鳥の書籍が多く残っている。昭和二十六年(一九五二)一月から一年間東本願寺宗務総長に就く。昭和二十九年(一九五四)八月二十七日死去。七十七歳。著述・書簡などは『暁鳥敏全集』に収録

されている。また、金沢大学には暁鳥が寄贈した人文科学や自然科学など様々な分野の書籍約五万冊が残されており、暁鳥文庫として公開されている。

〈参考文献〉

『日本近現代人名辞典』、吉川弘文館、二〇〇一

講談社学術文庫では、暁鳥敏の『歎異抄講話』の他に梅原猛名誉村長の全訳注による『歎異抄』を読むことができます。この本の中で梅原猛先生は、歎異抄について次のように述べています。「『歎異抄』は、異常な魅力を持った本である。『歎異抄』が日本人に知られるようになってから、まだ半世紀と少ししか経っていないが、その間『歎異抄』は、多くの人の心をとらえ、『歎異抄』についてのさまざまな解説書が生まれた。この本には、一読して人の心を奪わずにいられない魔力のようなものが備わっているであろう。」「どうかこの稀代の素晴らしい本を読む読者よ、じっくり原文を読み、その原文があなたの方にどう語りかけてくるか、その語りかけてくるものをよくよく心で味わってほしい。私の解説は、その理解を多少助けるかもしれないが、読んでしまつたら解説を忘れて、直接自分の目でこの本を読んでほしいと思う」と。

『歎異抄』は、浄土真宗の一教義書ですが、日本人の心の古典というべき側面も持っています。一度、手にとってみてはいかががでしょうか。
『歎異抄』、梅原猛、講談社、二〇〇〇